

現実のエンティティ間の 1 対 1 の関係

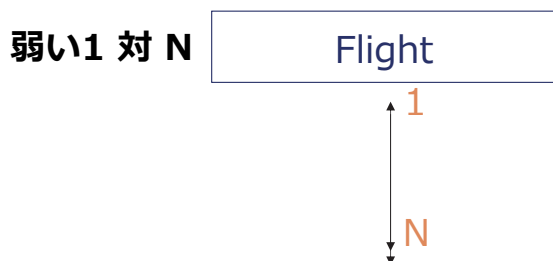
GeneXus™

前の章で扱った関係

1 対 N



弱い1 対 N



N 対 M

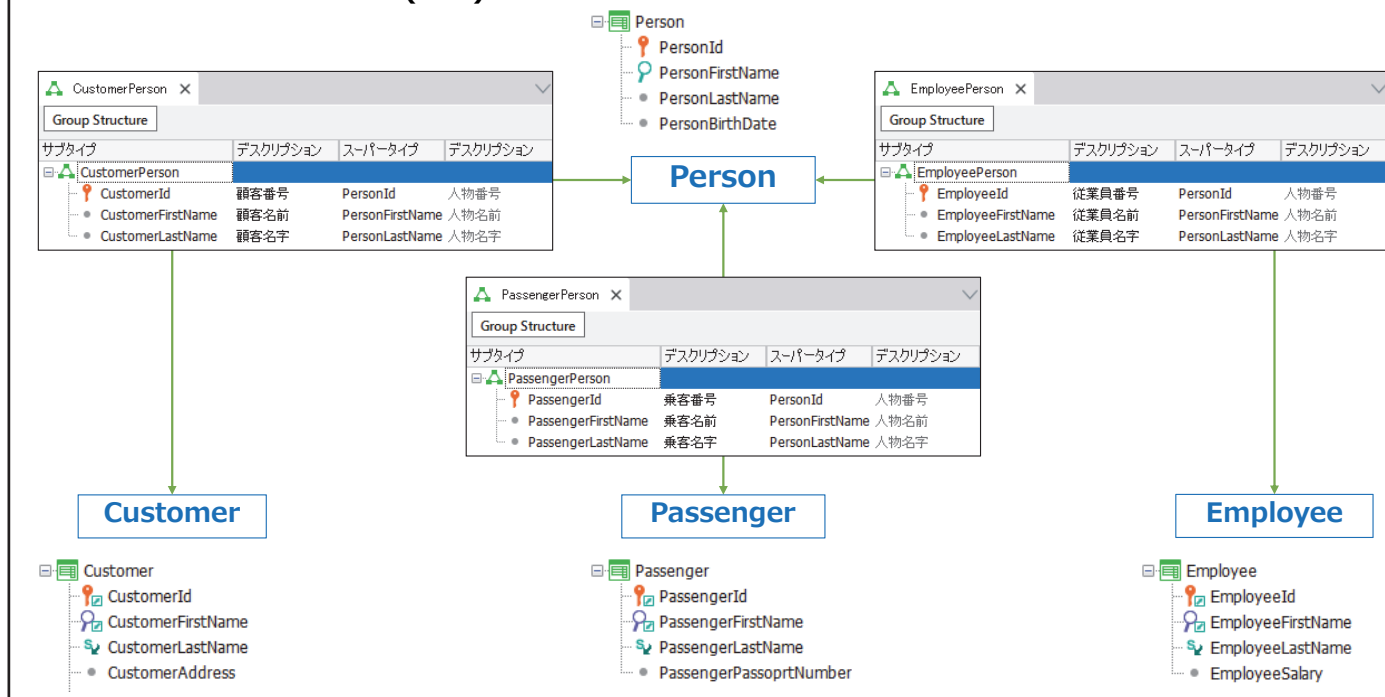


トランザクションとその項目属性を通じて、現実のエンティティ間の 1 対 N の強い関係と弱い関係および、N 対 M の関係を表すことができることを確認してきました。

ここでは 1 対 1 の関係に焦点を絞って説明します。

ほかの章で、1 対 1 の関係を表現したケースをいくつか見てきました。
ここではそれらの確認を行います。

スペシャライゼーション (特化)



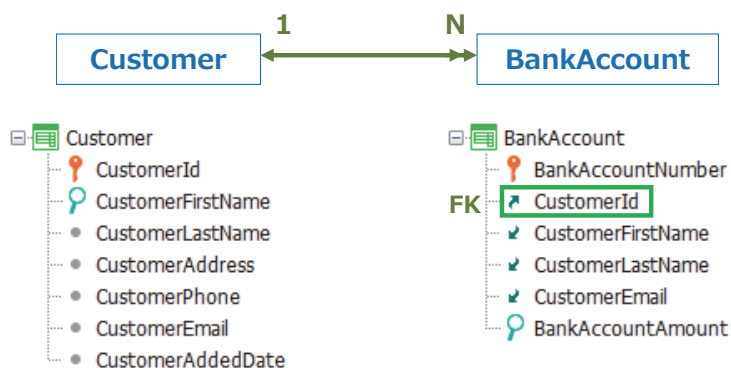
サブタイプを扱う章の最後に、項目属性の特化（スペシャライゼーション）のケースを取り上げていました。

このケースは、あるトランザクションで登録されたデータを異なる項目属性名で扱います。ただし、主キーとして定義された項目は、異なる項目属性名となった場合も主キーとして利用します。

このため、異なるトランザクション間で 1 対 1 の関係を表すことができます。

この関係がサブタイプの章で説明した理由としては、上記の通り異なる項目属性名で扱うためには、GeneXus では、サブタイプを定義する必要があるためです。

外部参照による 1 対 1

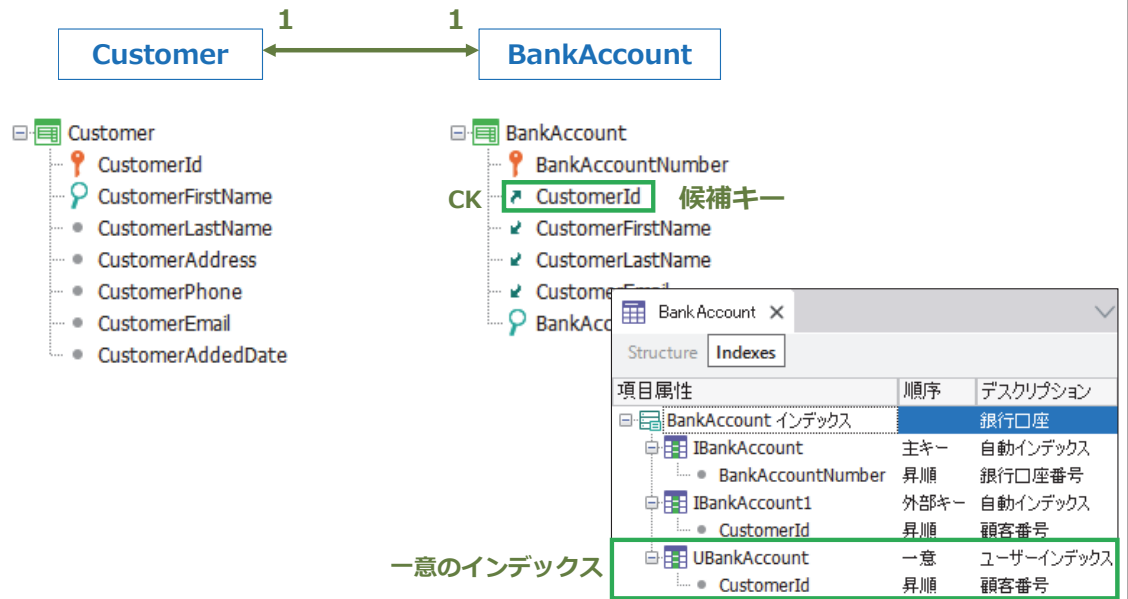


別の 1 対 1 を表したいケースとして、外部参照による関係で必要となる場合があります。一般的には、外部参照キーとして別のトランザクションのキー項目を含めた場合、1 対 N の関係となり、要件を満たすことができません。しかし、この点については、ここまでに説明した機能を利用することで表すことが可能です。

実装としては、N 側のトランザクションで、外部参照キーの値が重複しないようにすることで実現できます。

これは、どのような機能が必要でしょうか。

外部参照による 1 対 1（一意のインデックス）



ユーザーインデックスを作成し、一意のインデックスを定義することで実現できます。

ここまでの章で、GeneXus が自動で作成するインデックス、ユーザーが作成できるインデックスについて説明しました。

この中で、ユーザーインデックスにおいては、紐づけられた項目属性の値について重複を許可するか、一意な値しか入力できないかを指定できました。

外部参照による 1 対 1 を実現するためには、外部参照キーとなる項目属性を紐づけたユーザーインデックスを定義し、一意の値のみを許可するように定義します。

また、このような一意のインデックスによって、重複した値を入力できない項目を候補キーと呼ぶことも説明していました。

*GeneXus*TM

training.genexus.com
wiki.genexus.com